

同朋大学佛教文化研究所報

第32号

発行日 平成三十一年三月三十一日
 編集・発行 同朋大学佛教文化研究所

代表者 安藤 弥

〒四五三・八五四〇

名古屋市中村区稲葉地町七の二

TEL (〇五三) 四一三三三

FAX (〇五三) 四一三三六九

email: doc.insta@qdn.ac.jp

(題字は池田勇諦元学長)

仏教についての見識を持ち合わせてはいないのであるが、ご依頼を受けたので、学長の立場にある者として、この巻頭言を書くことになった。今年の大学の修正会でお話をしたことを中心に述べてみたい。

昨年十二月十五日に真宗大谷派名古屋別院の報恩講にお参りした。そこで「親鸞と被差別民衆」パネル展を見る機会があった。この展示で特に心に残ったことは、親鸞は、日本で初めて人間の平等性を問い、男女平等を唱えた人だということである。「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」という『歎異抄』第三条は印象的である。パネルの一枚には「男と女が互いに平等の莊嚴しあう関係により、解放と救済の道を歩む」とされた(六角堂の夢告 一一二〇一年 二十九歳)ともあった。

さて、話は現代に飛ぶのであるが、この親鸞の唱えた「平等」の夢は、この地球で実現したのであるか? 答えは「否」である。たとえば、この七十数億人の世界で、世界のお金持ち僅か二十六人が所有する富は、貧困人口三十八億人(世界人口の半分)が有する富と同等なのだという(二〇一九年一月二十四日毎日新聞)。もちろん経済的平等だけが平等の問題ではないが、一つの要素であることは間違いない。富の偏在は、この十年で倍になったというから、不平等さは前より広がっているというべきだろう。日本の相対的貧困率は、二〇一五年で四十二か国中第十二位(一六・一%)で、富の偏在が最も少ないデンマークは五・五%で三倍の開きがある。

男女平等については、世界経済フォーラム(WEF)が二〇一八年十一月二日、「世界ジェンダー・ギャップ報告書(Global Gender Gap Report) 2017」を発表した。対象は世界一四四か国で、格差が少ない

親鸞聖人の夢

同朋大学学長 松田 正久

一位はアイスランド、二位ノルウェー、三位フィンランドで、日本は一四位であった。先進国ではドイツ十二位、英国十五位など、いずれも日本より上である。ジェンダー・ギャップは、東アジア地域は相対的に低位で、中国一〇〇位、韓国一八位となっているので、総じて共通した社会構造を持っている。ただし、読み書き能力、初等・中等教育などは男女間に不平等は見られないという評価においては、日本は世界一位であり、中国は高等教育と教授・専門職では男女平等が進んでいると評価され、その点は世界一位とされた。

人間は皆平等であり、男女同権である社会を唱えた親鸞の夢は、没後七五〇年を経た今でも、実現には程遠い現実がある。日本国憲法の第十一条が基本的人権を謳い、性別を問わず個人として尊重され(十三条)、第十四条では「すべて国民は、法の下に平等であつて、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない。」として、すべての国民に対して平等であることを保証しているにもかかわらず、である。

国連は二〇一五年九月にSDGs(持続可能な開発目標)を定め2030アジェンダとして、全十七項目の目標を設定した。その第一項は「貧困をなくそう」第二項が「飢餓をゼロに」、第五項が「ジェンダー平等を実現しよう」である。私は、世界で、日本で、親鸞が語った夢が実現してほしいと心から願う。本学の建学の理念である「同朋和敬」の意味も同じである。仏教文化研究所には、その実現に向けた研究活動の取り組みをしていただきたい。

新出現の親鸞真蹟『廟崛偈』文

小山 正文

親鸞と聖徳太子

鎌倉時代前期の建仁元年（一一二〇）二十九歳の親鸞は、二十年間にも及ぶ比叡山での学問修行を捨閉閣抛し、当時上下貴賤の信仰を集めていた聖徳太子創建の京都六角堂（紫雲山頂法寺）に百日の参籠を行い後世をいのった。その九十五日目の暁、太子の文を結んで、六角堂本尊如意輪観音救世菩薩の示現にあずかり、法然房源空の門に入ったことはよく知られている。

この親鸞の自力聖道門の雑行を棄てて、他力浄土門の本願に帰しえた^{かため}要に、太子の導きがあったからこそ親鸞は、「慶ばしきかな西蕃月支の聖典 東夏日域の師釈 遇い難くして今遇うことを得たり 聞き難くして已に聞くことを得たり 真宗の教行証を敬信して 特に如来の恩徳の深きことを知んぬ 斯を以て聞く所を慶び 獲る所を嘆ずるなり」（『教行信証』総序・原漢文）という九十年に及ぶ生涯を送りえたのであった。

これがために親鸞は、終生太子に奉讃のまことを捧げ、太子に関する和讃、伝記、銘文などの撰述書を少なからず著わしている。今それを年代順に列挙すると、次のようになる（以下、著作名は（）の番号で示す）。

- (一) 『皇太子聖徳奉讃』 建長七年（一一五五）十一月晦日 親鸞八十三歳 七十五首
- (二) 『浄土和讃』 康元元年（一二五六）十一月廿九日 親鸞八十四歳 十三首〔通常依用の『浄土和讃』とは同名異本で、第十三首目を太子和讃とする〕
- (三) 『大日本国粟散王聖徳太子奉讃』 康元二年（一二五七）二月卅日 親鸞八十五歳 百十四首
- (四) 『正像末法和讃』 正嘉元年（一二五七）閏三月一日 親鸞八十

五歳頃 四十一首〔津市専修寺蔵国宝本『正像末法和讃』第三十八・三十九首目に（二）と同内容の太子和讃二首を入れる〕

(五) 『上宮太子御記』 正嘉元年（一二五七）五月十一日 親鸞八十五歳〔『三宝絵』に基づく太子伝〕

(六) 『尊号真像銘文』 正嘉二年（一二五八）六月二十八日 親鸞八十六歳〔聖徳太子画像の銘文二個を解説〕

(七) 『皇太子聖徳奉讃』 文応元年（一二六〇） 親鸞八十八歳頃とも 十一首〔文明五年（一四七三）三月蓮如開板本『正像末和讃』に所収〕

親鸞のこれらの太子関係の著作で、特筆すべきは四句〓四行を以て一首とする和讃が、実に（一）、（三）、（七）の三種二百首以上もあること^{かため}で、これ以外の親鸞作和讃三百余首と合わせ、和讃史上著名な存在となっている。この三種の太子和讃のうち親鸞自筆本が、今に現存するのは（一）のみで、それも全部ではなく断簡状態で処々に散在するばかりだが、著者の貴重な真蹟として大切に保存伝持されてきた。しかし、（一）には親鸞直門侶の真仏（一一二〇九～一五八）、顕智（一二二六～一三三〇）が書写する鎌倉時代の古写善本が、津市専修寺に所蔵されており、重文の指定を受けていて、見読には全然支障をきたさない。

一方、京都市大谷大学図書館には、光遠院恵空（一六四四～一七二二）の書写になる江戸時代中期の（一）がある。この恵空本は右の真仏・顕智本と内容構成に若干の違いがあり、近年とみに注目される写本となっている。

恵空本『皇太子聖徳奉讃』

さて、（一）で最も留意すべきものは、いうまでもなく諸方に散在する親鸞真蹟断簡であろう。現在、所在不明となっているものも含め二十五～六点的存在が確認できる。元来、真蹟本は、真仏と同様下野国高田に住した親鸞の愛弟子覚信へ、師より授与されたものであった。そのこ

とは京都市光照寺蔵の表紙からわかっており、親鸞が覚信へ写与した年月日も、真仏本の奥書から建長七年十一月晦日とみられてきた。

ところが、真仏本と上記の恵空本を対比研究した可西大秀師（『真宗聖教解説』一九三一年、仏教普及会）、本井信雄師（『皇太子聖徳奉讃』恵空書写本考）、一九八一年、『大谷学報』六〇―四）によると、まず可西師は、恵空本の末尾には真仏本にない『廟唄偈』文と『涅槃経』文がみられることを指摘し、金沢市専光寺と八幡市（北九州市八幡東区もしくは同西区に該当か）村田万吉氏所蔵の『廟唄偈』文および『涅槃経』文の親鸞真蹟は、恵空本の原本に当たる覚信へ授与の（一）の断簡と看破したのである。

他方、本井師は真仏本の第四十七・八首の番号のところには、恵空本の第六十七・八首の和讃が入っており、逆に恵空本の第四十七・八首の位置へは、真仏本の第六十七・八首の和讃が書かれていることに注意した。そして、昭和初期まで守山市真光寺の門徒宅内仏に掛けられていたが、今は所在不明の（一）の親鸞真蹟断簡に着目する。その文面は「^ハ四百八十余年^{コト}へテ ^{カント}漢土ニワタシキタリテハ ^{ミヤコ}ミヤコノ西^シニテラヲテ ^ハ白馬寺トソナツケタル」とあり、これの首数番号と本文が、恵空本と一致している事実を発見したのである。

つまり、恵空本こそが、方々に散在する真蹟本の原形をよく伝える写本と判明したわけで、したがって親鸞は、真仏本の親本である建長七年本と、恵空本の原本に当たる覚信授与本の都合二本の（一）を手懸けたこととなり、二本に内容や構成に若干の差異がある謎も解いたのであった。それでは真仏本の親本が親鸞八十三歳作ならば、覚信授与本は何歳頃になったのが問題となる。さいわい覚信授与本には、親鸞真蹟の断簡が幾葉か残っているので、これと少なからず現存する他の親鸞真蹟本とを比較検討すれば、おのずとその年代は絞られてこよう。その結果、建長年間よりも後の康元・正嘉（一二五六―八）頃、すなわち親鸞晩年の八十四―六歳頃の伸びやかで、雄勁な筆致に近いと鑑せられる。

そこで、この間の親鸞の行実で、（一）に関わるものを求めてみると、康元二年（一二五七）八十五歳のとき、（二）の太子和讃を作している事項が注意される。この（二）は（一）とセットで徳治二年（一二〇七）に道顕、応長元年（一二二一）に光殊^{マツ}丸從覚慈俊、文保二年（一二二八）に覚如宗昭たちが、それぞれ書写している事実を顧慮するならば、親鸞は（二）を作した康元二年に（一）も合わせて筆写し、これをセットで覚信へ授与した可能性も、ありうるのではないかと考えている。

磯長の『廟唄偈』文

このように親鸞真蹟の覚信授与本（一）の素性がわかってくると、可西師のいわれたごとく、金沢市専光寺や旧八幡市村田万吉氏蔵『廟唄偈』文も、あらためて見直す必要性が感じられてならない。

『廟唄偈』は聖徳太子が生前に築造した河内国磯長（大阪府南河内郡太子町叡福寺）の陵墓内に、みずから結偈した石碑文で、その全文は親鸞と同時代に活躍した法隆寺学問僧頭真の『聖徳太子伝古今目録抄』によると、次掲の十行二十句よりなる（○内の数字は句数を便宜的に付したもので、以下各句の本文もその番号で示す）。

太子廟唄内石面自注記文

松子写本
合海布

- | | |
|-----------|-----------|
| ① 大慈大悲本誓願 | ② 愍念衆生如一子 |
| ③ 是故方便從西方 | ④ 誕生片洲興正法 |
| ⑤ 我身救世觀世音 | ⑥ 定惠契女大勢至 |
| ⑦ 生育我身大悲母 | ⑧ 西方救主弥陀尊 |
| ⑨ 真如真実本一鉢 | ⑩ 一鉢現三同一身 |
| ⑪ 片域化縁亦已尽 | ⑫ 還帰西方我浄土 |
| ⑬ 為度末世諸衆生 | ⑭ 父母所生血肉身 |
| ⑮ 遺留勝地此廟唄 | ⑯ 三骨一廟三尊位 |
| ⑰ 過去七仏法輪所 | ⑱ 大乘相応功德地 |
| ⑲ 一度参詣離悲趣 | ⑳ 決定往生極樂界 |

この『廟幅偈』文は、太子の舎人^{とねり}大鳥部文屋松子が編した当初十巻あるいは十二巻もあった『松子伝』と通称される太子伝の第十巻に収められていたものが流布したという。偈文からもわかる通り、磯長の太子廟には、推古天皇の法興三十一年（六二二）十二月二十一日に崩じた用明天皇皇后で、太子の母に当たる穴穂部間人、その翌年二月二十一日に亡くなった太子妃の膳^{かしわでのほきまのいらつめ}菩提々美郎女、続いて翌二十二日に薨じた太子の三人が、合葬される違例の円墳墓となっている。

『廟幅偈』文⑤⑧は、その三人が弥陀^{あまのふた}太子母、観音^{くわんおん}太子、勢至^{せじ}太子妃の三尊に擬する点を見通してはならない。なぜならここには平安中期以降勃興してくる浄土教思想が、すでに色濃く反映しているからである。それはそのまま『廟幅偈』文が、太子の親作ではなく後世の作になることをみずから物語るものにはかならない。しかし、『廟幅偈』文は、磯長に依る念仏勧進聖たちによって全国的に広められ、太子自記説は絶対的となり、偈文の⑯・⑳は誰も信じて疑わず、親鸞も例外ではなかったのである。

ところで、親鸞見写の『廟幅偈』文を恵空本（一）に当たってみると、全十行二十句のうち⑨・⑩・⑪・⑫の二行四句を欠くものとなっている。これは上にみた和讃二首の位置が入れ替っていると同様、老齢化にともなう親鸞のケアレミスとは、一概に言えない面があるかと思う。というのも、親鸞には太子関係著作の（五）にも『廟幅偈』文を掲載するが、その全文は末尾に「印度号勝鬘夫人 震旦称惠思禅师」の一行二句が加わった十一行二十二句本となっている事例も存するからである。

親鸞の時代、『廟幅偈』文は「最秘事也」といわれていたことが、顕真の『古今目録抄』にもみえるので、秘されれば秘されるほど広がる性質があると同時に、異文のものも多かったと推測する。要は親鸞の見た『廟幅偈』文は、八行十六句本と十一行二十二句本の二種であったということであろう。ただし、（二）の②の「衆生」が、（五）では「有情」に変更されているのは、建長七年頃から親鸞が、旧訳の「衆生」より玄

奘（六〇〇〜六四）以後の新訳「有情」を良しとした反映であろうゆえ、ここは親鸞の改変とみておく。

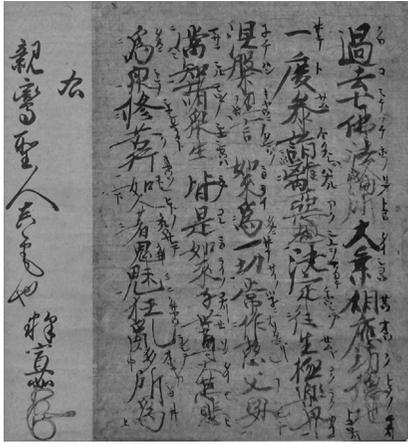
親鸞真蹟の『廟幅偈』文

さて、以上のごとく、今は断簡状態となっている親鸞真蹟（一）の覚信授与本には、親鸞在世中の写本である真仏本にはない『廟幅偈』文と『涅槃経』文が付されていたことは確実で、金沢市の真宗巨利専光寺蔵『廟幅偈』文四行一軸（図版一）は、その一部分に相当する。覚信本の原形を伝える恵空本に照らすと、専光寺断簡の前後には、なお各一ページ分ずつの親鸞撰述年月日や『廟幅偈』文、それに『涅槃経』文などがあつたはずである。

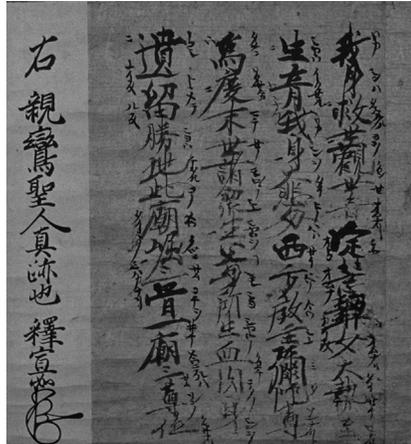
これにつき専光寺には、（二）の奥書「建長七歳乙卯十一月晦日書之 愚禿親鸞^{六六}」も存すると早くからいわれており、また上に引用しておいたように可西師は、専光寺の『廟幅偈』文が八幡市村田万吉氏蔵の断簡に連絡するとも記している。どちらも重要かつ大変興味深い情報で、全部を合わせると（一）の覚信授与本に付記されていた親鸞真蹟の『廟幅偈』文、『涅槃経』文の全文が揃うのかもしれない。しかし、三点のうち専光寺の『廟幅偈』文以外、今日に至るまで、その写真すら一度も公開されたことがないのである。

そうしたなか筆者は、当研究所が昭和五十六年（一九八一）八月に実施した福井県越前町浄勝寺調査で見出した『廟幅偈』文、『涅槃経』文の朱筆による影写本は、その筆致から専光寺の断簡に接続するものであると直感し、この部分の親鸞真蹟は、どこかに秘蔵されているに違いないと確信した次第である。

はたして平成三十年（二〇一八）五月京都の某古書肆目録に、浄勝寺影写本の原本に相当する親鸞真蹟が出ているではないか。早速発注したらしいわいにも安城市本證寺林松院文庫へ納まったので、本報を借りて紹介したいと思う。



図版二 (安城市本證寺蔵)



図版一 (金沢市専光寺蔵)

図版一・図版二は、親鸞真蹟で、門侶の覚信へ授与された『皇太子聖徳奉讃』の最末尾表裏に相当するものである。

新出のこの真蹟断簡(図版二)は、縦二六・七×横一九・六センチを計測し、専光寺断簡の縦二六・五×横一七・六センチに近い数値を示す。紙質はやや轟立った鎌倉時代の楮紙で、これも専光寺にまったく同じである。紙面には漢字五行が墨書されており、細かく振り仮名、読み仮名、返り点を施す。これらの筆致筆跡は、枯淡の中にもスピード感のある力強いもので、これが前ページの専光寺断簡と同一筆者による同時書であることは、誰の目にも明らかである。

紙面五行のうち、はじめの二行は、『廟幅偈』文の末尾⑰・⑱・⑳が、専光寺断簡に連続して、筆墨を改めることなく認められ、さらに引き続き『涅槃経』巻第二十梵行品阿闍世王供讚偈の文八句が、一気呵成に書かれて、(一)全体の筆が攔かれています。

この『涅槃経』の文は、元仁元年(一二二四)頃の著作とされる『教

行信証』信卷(『親鸞聖人真蹟集成』第一卷三〇〇〜一ページ)、文暦二年(一二三五)〜嘉禎三年(一二三七)頃に成った『見聞集』二(同第九卷一四〜五ページ)、康元元年(一二五六)撰述の『浄土和讃』(同第十巻口絵三・三八〇〜一ページ)等々の著述類でも親鸞は引用しているから、余程重視していた経文のひとつであったとわかる。

今回出現の『涅槃経』文は、右掲『浄土和讃』所載のものと瓜二つで、(一)の覚信授与本の年代も、それに近い親鸞八十五歳あたりとみるのも、あながち不当ではないように思考する。

なお、ここで新出断簡が、専光寺断簡に続く親鸞真蹟であることをよりよく理解するために、双方に共通して登場する文字を左に抽出し、比較検討の便宜に供したく思う(数字は双方に出ている同漢字を回数順に示したもの)。

- 生〔5〕 世〔4〕 大〔4〕 為〔4〕 母〔3〕
- 尊〔3〕 衆〔3〕 所〔3〕 一〔3〕 定〔2〕
- 悲〔2〕 度〔2〕 諸〔2〕 父〔2〕 地〔2〕

宣如の極書

表裏一体をなす専光寺と新出の親鸞真蹟断簡には、共に東本願寺第三代宣如(一六〇四〜五八)の極書が付されている。前者には「右親鸞聖人真跡也 釈宣如(花押)」とあり、後者も、「真跡」が「真筆」と書かれている以外同文である。極書の前者の大きさは、縦二六・五×横五・〇センチ。後者のそれは、二六・七×五・五センチで、ほぼ同大である。

専光寺第十一代宣慶(一六二九〜六七)の室は、宣如の息女長子(一六二九〜九〇)であったから、輿入の際、持参したものかもしれない。新出本の来歴はよくわからないが、落ち着いた立派な古金欄表装、美事な水晶の太き軸首、そして本願寺法主宣如の極書が付されているところなどより、これもやはり本願寺と親縁関係にある然るべき真宗古刹に伝

来た法宝物であったと想像したい。ちなみに、新出本は昭和六年（一九三一）頃、八幡市村田万吉氏蔵となっていたことは、可西師の著書からわかるが、軸箱内には、「親鸞聖人御真筆 涅槃経ノ御文 但シ宣如上人御極メ付 右之仏ヲ入ル函也 当時右ノ仏及極メ共 仏様箱江入置有之候也 増田主」と紙片に墨書された覚が入っており、本断簡の持主が村田氏より増田氏へ変わっていることを伺わせるも詳細は不明である。

最後に、この親鸞真蹟の出現を機に拙著の誤りを訂正しておきたい。それは可西師の上掲名著五七七八ページの専光寺に蔵する文は、「八幡市村田万吉氏所蔵の断簡に連絡する」との記述を、村田氏断簡の内容をまったく知らなかった筆者は、自分勝手に専光寺断簡が、村田氏断簡に連絡するものと解釈し、拙著『親鸞と真宗絵伝』四四六頁（二〇〇〇年法藏館）、『続・親鸞と真宗絵伝』三九ページ（二〇一三年法藏館）にも、そのように記してしまったのである。可西師に深くお詫びすると共に、拙著の誤記をここに訂しておく次第である。

なにはともあれ、新たに親鸞真蹟が出現したことを慶喜し、間もなく迎える聖徳太子千四百回遠忌の際に、処々に散在する親鸞真蹟『皇太子聖徳奉讃』を一堂に集める画期的な展示が、催されればと念願し摺筆するものである。

【謝辞】今年度、研究所の『所報』、および、『紀要』の写真掲載にあたっては、専光寺ご住職の特別なご理解のもと、これをご許可いただいた。心よりお礼を申し上げる次第である。

平成三十年（二〇一八）十一月二十二日

〔新刊紹介〕

安藤 弥

◎青木馨著『本願寺教団展開の基礎的研究―戦国期から近世へ』
本書は、本研究所の客員所員を長らくお務めいただき、真宗史料調査の主導的役割を担っていたいただいている著者が、大谷大学に提出した博士論文である。学位（博士〈文学〉）取得を心よりお祝い申し上げる。次に本書の目次を掲げる。

序 論——研究史と課題

第I編 三河における地域道場から教団への展開

第一章 三河の初期真宗概観

第二章 文明十六年『如光弟子帳』

第一節 如光門徒道場の形成

第二節 『如光弟子帳』の性格

第三節 「天正十九年末寺帳」

第三章 本宗寺の成立と展開

第一節 本宗寺の創建

第二節 吉野門徒の動向

第三節 本宗寺実円

第四節 別坊鷲塚坊

第五節 補結

第四章 本願寺教団の形成

第一節 三河の大坊主の動向

第二節 裏書史料に見る末寺道場の成立と分布

第三節 両本宗寺内と三河門末の与力化

補 論 「御文」本流布の実態

第II編 本願寺門主制と近世の末寺身分

第一章 本願寺門主制の性格

第一節 門主の権能

第二節 門主制と近世家元制

第二章 戦国期門主とその一族——装束に見る——

第一節 教行寺実誓影像と装束

第二節 門主と一族の社会的身分

第三章 「似影」に見る住職家の成立と格付

第一節 真影と似影

第二節 法衣と身分

第三節 近世的身分と家元制

第四節 地方家元化への動向

補論 願力寺所蔵史料『余間昇進記録』

第III編 本願寺下付物と墨書名号

第一章 戦国期本尊・影像論

第一節 蓮如・実如期下付と「裏書」

第二節 名号本尊と絵像本尊

第三節 開山親鸞像と蓮如寿像

第二章 墨書名号の考察

第一節 草書体六字名号

第二節 蓮如筆墨書名号の意義

第三節 蓮如・実如期下付本尊と墨書名号

補論 墨書幼児名号について

総論 由緒・伝承の成立

第一節 御旧跡の成立

第二節 法宝物と聖地の創出

第三節 願力寺由緒の創成

結語

本書は、蓮如期における本願寺教団の形成に際して、その基底をなした在地道場の生成を基本的視点とし、これらの道場が近世的寺院へと成長し、教団内身分を獲得してゆく様相を考察するものとされる（序論、三頁）。

第I部では、三河地域を事例に戦国期本願寺の地域教団の形成を論ずる。末寺帳を中心に佐々木上宮寺の門徒分布を検討し、また、一家衆寺院本宗寺の歴史的展開を土呂・鷲塚両坊体制という視点を中心に論じた上で、総合把握を提示する。

第II部では、本願寺「門主」制の歴史的特徴を近世の家元制に求め、それに基づく門主の権能を論じる。とくに許可される法衣・装束が絵画にどのように描かれているか検討し、その実態とともに、権威化の動向・実態を問題として把握する。

第III部では、著者の研究の焦点である蓮如筆名号に関する論考を軸に、本願寺下付物とそれを取りまく歴史状況を論ずる。筆跡の特徴をタイプ別に分類し、蓮如・順如・実如らの名号を見極める手法の提示は画期的で、これが真宗名号研究の基準となる。

本書は最後に総論を配置し、その課題が「由緒・伝承・旧跡はどのように創られたのか？」（帯文）であることに驚かされる。①三河地域教団の形成も、②本願寺「門主」制論も、③名号研究も、④由緒・伝承という課題によって貫かれることになる。そこに疑問を持つ読者もいるであろうが（④がなくとも①②③いずれも独自の論点を持っているという意味において）、④の課題で①②③を総合することができるといふ視点こそが、著者の研究のすぐれた特徴であり、その長年にわたる研究を支えたものであったと理解することができる。

本書にまとめられた著者の研究は、本研究所四十年の研究活動の歩みとともにあったと言ってもよいだろう。すでに真宗法宝物史料研究に比類なき足跡を残した著者の「生きてきた証」（あとがき）を示す一書であるが、今後いつその研究活動におけるご活躍を念ずる次第である。

本慶寺所蔵書籍群（本慶文庫）整理作業中間報告〔二〕

本慶寺（真宗大谷派・岐阜県海津市南濃町）の住職山上正宣氏から、同寺所蔵の書籍群について相談を受けたのは二〇一二年年度のことである。本学第三代学長山上正尊を輩出した同寺には、学術書はもちろん、学園関係資料も多く残されていた。

その後、法宝物の一部とともに書籍群の寄託を受け、整理に取り掛かったが、相当な時間を要することになった。昨年度の所報で整理作業の中間報告と今後の見通しについてのレポートを掲載したが、今号でも中間報告〔二〕を行う（文責 安藤弥）。

*

〔山上正尊と同朋学園〕

山上正尊（一八九〇—一九六九）は、同朋大学第三代学長であるのみならず、同朋学園の要職を歴任している。関係年表を次に掲げる。

大正十五年（一九二六）九月 私立真宗専門学校教授（三十六歳）

昭和二十五年（一九五〇）四月 東海同朋大学教授（六十歳）

昭和三十二年（一九五七）一月 東海同朋大学学長（六十七歳）

四月 学校法人同朋大学理事長（ク）

〃 同朋幼稚園園長

昭和三十四年（一九五九）二月 同朋大学学長（六十九歳）

（同年三月三十一日）

昭和四十年（一九六五）四月 名古屋音楽短期大学学長（七十五歳）

昭和四十二年（一九六七）四月 名古屋造形芸術短期大学学長

（七十七歳）

すなわち、学校法人の理事長も務め、さらに、同朋学園五機関中、高校以外の四機関の長を務めているのである。音楽大学と造形大学のいず

れも開学とともに初代学長を務めている点はまた大きな意味を持つ。

そのため、本慶寺から寄託を受けた中には往時の学園を知る貴重な資料も含まれている。その内容は主に学生・園児や教職員の動向、教育・研究活動に関するものである。その中の一つに講義「真宗聖教史論」のノートがあった。

〔山上正尊の著述と真宗聖教史論〕

山上正尊の研究者としての評価については本格的検討を待たなくてはならない。次に主要著述を掲げておく。

・『愚禿親鸞の意義』（其弘堂書店、一九三二年）

・『愚禿親鸞教義の精要』（其弘堂書店、一九三二年）

・『三部経大意の検討 建長正嘉両本対照』（東本願寺、一九三五年）

・『南国の原始真宗』（其弘堂書店、一九三六年）

・『一念多念文意講讃』（東本願寺、一九五六年）〔安居本講〕

・『仏典用語略字』（東海同朋大学同朋学会、一九五七年）

・『祖聖を偲びて』（同朋学園、一九六一年）

・『教行信証証卷講』（出版社・年次不明）

ここに「真宗聖教史」というテーマ・視点を持つてみると、『真宗学報』第二号（真宗専門学校、一九二七年）に願得寺実悟の『聖教目録聞書』を初めて紹介していることにも注目したい。同史料は、大正十二年（一九二三）に正尊が善徳寺（現富山県南砺市）で発見したという。中世にさかのぼる貴重な真宗聖教目録史料である。正尊がそうした真宗寺院史料調査活動をしていること、また、真宗聖教の歴史的展開を確かめながら、「祖聖」なる「愚禿親鸞」の教学をたずねていく学問的手法をとっていることは興味深い特徴である。

何よりも、研究調査の成果を学生教育の現場で活かしていることは、大学教員としての重要なスタンスである。詳しくは後考を期したい。

《研究会活動報告》

アジア仏教研究会

武田 龍

開催日 4 / 23、5 / 14、6 / 25、7 / 25、8 / 30、9 / 28、

10 / 11、11 / 22、12 / 26、2 / 5、3 / 12

参加者 玉井威・武田龍・宮崎保光・浦池勢至・岩瀬真寿美・中川剛・

大住誠

前田恵學博士の呼びかけにより「仏教における最高究極の価値とは何か」を課題として二〇〇四年四月に発足したアジア仏教研究会は、ほぼ毎月一回の研究会を開催し、とうとう一二九回を数えるに至った。地道な努力の積み重ねに驚く。師は死してなお導いておられる。

浄土三部経を五年かけて通読した後、鳩摩羅什訳『法華経』（岩波文庫）を各自の関心に基づき愚直に読み続けている。今年は「化城喻品第七」を読み進めた。

「化城喻品」は如来の説法を主題とする。内容は二つに大別でき、前半は大智勝如来の成道から説法に至る経緯を描き、後半は如来の巧みな方便を説法で示す。前半はパーリ律蔵大毘婆沙（受戒毘婆沙）の冒頭の仏伝と同じテーマであり、しかもそれを大いに借用している。パーリ受戒毘婆沙の仏伝は、釈尊の言行を伝える数多くのエピソードを素材として早い時期に編集されており、仏伝としての完成態を示すものである。上座部から連綿と伝持され、現在では、テーラワダー (Theravada) 主に東南アジア地域に広く信仰され、パーリ聖典を奉持する上座仏教の最重要な聖典となっている。

パーリの仏伝は、成道後に大いなる躊躇を経て説法決意に至る釈尊の

心境の変化を、梵天勸請譚を用いて劇的に描くことで知られるが、実は、自利の求道の究極に仏陀となった釈尊が自利の聖者の境地に安住できなくなり、利他の聖者へと進化成熟する課程を描くものである。自利の聖者から衆生済度の本質とする利他の聖者へと成熟する進化の過程を、仏弟子たちはタターガタ (tathāgata) の語で表現した。tathāgata「そのように進んだ」の意味で採用されたこの語は、他の宗教指導者とは異なる特質を具えた釈尊その人を指す語となり、やがて仏教の最高の聖者の尊称として使用されるようになった。中国人仏教徒は「如去」の訳語も作ったが、真理（如、真如）に到達した後で「如より（現世濁世に）還り来た」（tathā+āgata）聖者と受け取り、「如来」の訳語を与えた。この訳語が優勢になった。

化城喻品では十六人の息子たちと十方世界の梵天王たちから勸請されると、パーリと異なり躊躇することなく説法を決意する。bahujanāhīyā bahujanāsukhāya loka-anukampāya「多くの人の利益のため、多くの人の幸福のため、世間を憐愍して」とパーリの定型句を借用し、最初説法は四諦の十二行相と十二因縁であるが、八正道の教えはない。

如来は雄弁に説法する。迷いはない。成道しても世間と交わらず、沈黙を守る孤高の仏陀を辟支仏 (pratyekabuddha) と法華経は批判する。一乘真実、三乘方便という主張はこれである。

真宗史研究会

安藤 弥

二〇一八年度は次のとおり、二回の研究会を実施した。

第一回目（通算第三八回）

【日時】五月十二日（土）一六時～一七時三〇分

【報告者】垣内健克氏（名古屋大学卒業生）

【題目】「三河真宗三ヶ寺をめぐる中世史料論」

第二回目（通算第三九回）

【日時】七月十二日（木）一六時～一七時三〇分

【報告者】安藤弥（所長）

【題目】「三河大浜騒動をめぐる―石川台嶺『幽囚日誌』の基礎検討―」

垣内氏は、三河佐々木上宮寺の末寺帳史料群を丹念に検討され、とくに各地域における道場・寺院の変遷過程を図表化して把握しつつ、各史料の歴史的性格について論じられた。安藤は、当初の報告者の辞退により、急きょ三河大浜騒動の一史料の基礎検討を提示した。

次年度も引き続き二回程度の研究会活動を予定している。

東アジア仏教思想史研究会

藤村 潔

開催日 4/27、5/28、7/9、8/6、9/19、10/22、

11/26、12/14、1/21

参加者 玉井威、藤村潔、岩瀬真寿美、中川剛、廣田万里子

本研究会では、鎌倉後期に活躍した華嚴宗の示観房凝然（一二四〇―一二三一）の文献を中心に研究している、主に『大日本仏教全書』に収録される『八宗綱要』二卷（二十九歳、以下『綱要』）の原典資料を定本に読解している。また、必要に応じて、同じく凝然の『三國仏法伝通縁起』三卷（七十二歳、以下『縁起』）、同時代の存覚『歩船鈔』二卷の資料を参照している。

今年度は「法相宗」についての教理と歴史について思想的に究明した。今日性相学、法相唯識と呼称されるものは、インド求法の旅を終えた玄奘三蔵（六〇〇、六〇二―六六四）が将来した新訳文献に基づくものである。無論、それ以前に真諦三蔵の唯識文献が現存するが、玄奘の登場により歴史上「古唯識」と「新唯識」が厳密に峻別された。

凝然は「法相宗」の教義に対して要領よく纏めている。この点、昨年まで研究を取り組んできた「律宗」の分量とは、はるかに異なる。『綱要』では、まず、瑜伽行唯識の淵源をインドの歴史から遡及し、その伝承が中国・日本では慈恩大師基（六三二―六八二）の「法相唯識」として確立され、その教系が鎌倉後期まで連綿と継承されていることを紹介している。『綱要』では法相宗の主要教理を、三時教判、五姓各別、行位、五位百法、五重唯識、唯識四分義、三性三無性、転識得智（四智）と論説される。研究会の中では、インドのアビダルマ仏教の視点を踏まえた上で、そもそも「瑜伽行唯識」が東アジアの視点を踏まえていくのかを追及した。そして特に関心を集めたのは、「法相宗」と呼称されるものは、玄奘の思想というよりかは、高弟の慈恩大師基が『成唯識論』（六五九年訳出）を中心とした教義によって思想が形成された学派、つまり、法相教理の大半は基の著作に基づく概念であったことが確認できた。こう見ると、インドの瑜伽行唯識と東アジアに伝播された法相唯識との間には思想的に懸隔があると言わざるを得ない。これらの点が本年の研究会によって判明された大きな成果であった。

「日本仏教の成立と展開」研究会

脊古 真哉

「日本仏教の成立と展開」研究会（小島恵昭・大山誠一・黒田龍二・脊古真哉・吉田一彦・藤井由紀子）では、各研究参加者の研究領域・関心を基礎に、幅広く日本仏教・日本宗教に関わる問題を取り上げてきている。二〇一八年度には、二〇一八年八月八日および二〇一八年一月二四日に研究会を、二〇一九年二月二四日・二五日の両日に現地踏査を実施した。

八月の研究会では、脊古の「役小角伝考―役小角・役行者伝から見えてくること―」の報告が、一月の研究会では①脊古「古代近江国の神仏交渉―金勝寺の神仏交渉理解のために―」および②山下立氏（滋賀県立安土城考古博物館）「神像彫刻の特質―近江の作例を中心として―」のいずれも近江国の神仏交渉を対象とする2本の報告が行われた。両日とも研究参加者だけではなく、外部からの参加をも得て活発な議論を展開することができた。

二〇一九年二月の現地踏査は滋賀県米原市・近江八幡市の寺院・神社・仏堂・博物館等を踏査・見学し、特に二五日には琵琶湖に浮かぶ沖島に渡り。現地の神社・資料館を踏査・見学し、史料調査も実施することができた。二回の研究会と併せて、近江国を中心とする神仏交渉についての知見深めることができ、有意義なものとなった。

※「仏教教育研究会」は本年度より休会となりました。

教行信証学習会

吉田 曉正

講師 師 張 偉 先生

趣 旨 漢文として『教行信証』を読む

会 場 同朋学園D・プラザ閲蔵2F 多目的会議室

テキスト 東本願寺刊『真宗聖典』（必要に応じて資料配付有）

開催日 二〇一八年 5/24、6/28、7/26、9/27、10/18、

11/22

二〇一九年 1/24、2/28

『教行信証』『化身土巻』を中心に、親鸞が言葉の中に込めたメッセージを確かめるように学習を進めている。特に、親鸞の言語表現、文字への厳密さに注目して読むこと、また、その表現の中に込められている重層的な意味を読み取ることを意識しながら読解を進めている。

今年度は、「化身土巻」の三願転入について学ぶ過程で、これまで読み進めてきたことを踏まえつつ、様々な疑問や課題を提起し合い、その問題を手掛かりに学習を進めた。

その中で、特に、現生正定聚と二種回向が課題となった。「正定聚のくらいにさだまる」こと、不断煩惱得涅槃、そしてそこに往相還相がどのように関わるのか。私たちにとって煩惱とはどういうことなのか、どのように向き合っていくのかということが大きな問いとなった。煩惱具足の私が、どのような道をたどって念仏の道を歩むものとなっていくのかという問題である。この問いを尋ねていくために、今後は、「信巻」における王舎城の悲劇の問題を確かめつつ学習を進めたい。

二〇一八年度彙報

《研究所構成メンバー》

所長 安藤 弥

所員 古川桂 (人文学科) 木野美恵子 (社会福祉学科)

石牧良浩 (社会福祉学科)

所員・幹事 市野智行 (仏教学科)

研究顧問 小山正文 蒲池勢至 小島恵昭 玉井 威

所員 (非常勤) 藤井由紀子 千枝大志

客員所員 青木馨 飯田真宏 岩瀬真寿美 大山誠一 大艸 啓

岡村喜史 北畠知量 ギャナ・ラトナ 工藤克洋

黒田龍二 嘉木揚凱朝 脊古真哉 新野和暢 武田 龍

服部 仁 藤村潔 ブレニナ・ユリア 松金直美

吉田暁正 吉田一彦

客員研究員 花 栄 川村伸寛 周夏 高木祐紀 中川 剛 松山 大

特別研究員 日比野洋文

《所員会議》

4 / 10、5 / 15、6 / 19、7 / 24、10 / 9、11 / 6、12 / 13、

1 / 15

《公開講座等》

・現地で学ぶセミナー

第1回 7 / 8 「講師」脊古真哉

「金勝寺と四社の鎮守―御上神社・兵主神社・山津照神社・飯道神社―

第2回 9 / 26 「講師」藤井由紀子

「神宮皇后 その伝承地の風景を旅する―福井県敦賀半島・常神半島―

《ギャラリー史料展示》 (会場ⅡDopラザ閣蔵1階ギャラリーD)

・前期 (7 / 11 ~ 7 / 19) 「担当」藤井由紀子

「戦時下の中国仏教研究Ⅱ―石壁山玄中寺復興と「小笠原宣秀」資料―

・後期 (11 / 7 ~ 11 / 20) 「担当」安藤 弥

「点字で読む經典・書物―福祉と仏教の歴史的实践―」

※真宗大谷派名古屋別院との共催事業。

※関連企画 (11 / 19 佐賀枝夏文氏 (大谷谷大学名誉教授・高倉幼稚園

園長) と安藤弥によるギャラリートーク)

※併催「知る人ぞ知る! 同朋大学仏教文化セレクション」展

《史料調査活動》

・真宗寺院史料調査

9 / 11 河野栄泉寺 (真宗大谷派・愛知県一宮市)

9 / 13 浄安寺 (真宗大谷派・岐阜県岐阜市)

1 / 31 法林寺 (真宗大谷派・京都府福知山市)

2 / 12 ~ 14 浄嚴寺 (真宗大谷派・岐阜県海津市) *継続調査

3 / 10 ~ 12 本誓寺 (真宗大谷派・岩手県盛岡市) *継続調査

《特別活動》

・日本仏教学会大会 (会場Ⅱ同朋大学) におけるギャラリー史料展示

「知る人ぞ知る! 同朋大学仏教文化セレクション」展

〔会期〕9 / 4 (火) ~ 5 (水) *ただし台風により9 / 5のみ開催

〔会場〕Dopラザ閣蔵1階ギャラリーD。

・伊東恵深著『親鸞と清沢満之 真宗教学における覚醒の考究』合評会

〔日時〕10月8日 (月・祝) 13時30分 ~ 16時30分

〔会場〕大谷大学慶問館K309教室

※内容・詳細については紀要第38号に掲載。

・その他、随時、研究所への学術的来訪・打診へ対応。